

13 : 25 ~ 14 : 25

特別講演

ユトレヒト会議室 4

司会 : LET 九州・沖縄支部副支部長 樋口 晶彦 (鹿児島大学)

CALL 授業の展開 —その可能性を広げるために—

竹内 理 (関西大学)

はじめに

本講演では, CALL 研究・実践のこれからの方向性について, 具体例を交えながら論じていく。なお, ここでいう CALL とは, CALL 教室のような物理的空間や装置のことを指すのではなく, テクノロジーの使用と, それによって織りなされる関与者 (教員, 学習者), 言語, そしてそれらを取り巻く世界との相互関係のことを意味する。

3つのキーワード

Bax (2003) や Lafford (2009) らは, これからの CALL 研究のキーワードとして, 「統合化」と「常態化」をあげている。筆者はここに, 「アフォーダンス」という用語を加え, 具体例をあげながら, 3つのキーワードを解説していく。

言語学習のエコロジー

その後, 上述した3つのキーワードを統合する「言語学習のエコロジー」(Ecology of Language Learning: van Lier, 2004) という枠組みについて議論したのち, これからの CALL 研究・実践の方向性について, a) 教授・学習法のあり方, b) 評価の方法, c) 教員養成のあり方, d) 研究手法などの観点から論じていく。

おわりに

まとめとして, CALL の研究が, 単なる機器を利用した言語教育のように位置づけられるのではなく, 教師と学習者にとってのエンパワーメントやエイジェンシー獲得の道具として作用するよう (竹内, 2008), 方向性を示していきたい。

References

Bax, S. (2003). CALL-past, present, and future. *SYSTEM*, 31, 13-28.

Lafford, B.A. (2009). Toward an ecological CALL: Update to Garrett (1991). *The Modern Language Journal*, 93 (Focus Issue), 673-696.

竹内 理 (編著) (2008). 『CALL 授業の展開—その可能性を拓げるために』 東京: 松柏社

van Lier, L. (2004). *The ecology and semiotics of language learning: A sociocultural perspective*. Boston: Kluwer.

☆第1室

ユトレヒト会議室2

司会：染矢 正一（大分県立芸術文化短期大学）

司会：田上 優子（福岡女子大学）

15:00～15:30

Needs Analysis: How do Stakeholders Perceive What Junior & Senior High School Students Want?

川浪 一也（福岡大学附属大濠高等学校）

Based on the claim by Brown (1995), I conducted needs analysis with junior and senior high school students. I utilized triangulation (Miles & Huberman, 1984), soliciting stakeholders: students, teachers, and professors to reflect learners' needs on learning English language in secondary school level and beyond. Though the societal climate surrounding English education in Japan is sometimes referred to as "English for No Specific Purposes" by some critics, it is always possible to identify needs "even if it is only the needs to pass the exam at the end of school year" (Hutchinson & Water, 1987). I had 440 students, 11 English instructors and 11 professors affiliated with the school as participants. I used Likert scale survey instrument along with open-ended questions to make up for the incomplete nature of a single perspective (Long, 2005). Incorporating the responses and results revealed, three goals and ten objectives are suggested for the future curriculum development.

15:35～16:05

英語学習における主体的な活動について

—eラーニング教材「EDO(English Discoveries Online)」の有効的な使用の一例—

田口 純（筑紫女学園大学）

ここ数年、少子化による受験者数の減少のため、大学等では多様な推薦入試を実施し、一人でも多くの入学者を確保しようと努力している。しかし、一般入試と異なり、推薦入試では学力試験を課すところは少なく、面接や書類選考などで実施され、英語力を測る機会に乏しいのが現状である。一方、受験者の方では、高校入試から推薦が行われており、中学、高校を通じて、必ずしも英語力が高なくても、日頃の学校生活を真面目にこなしていれば、推薦に値するため、主体的な活動が十分に身につけていないまま、大学等に進学している。さらに、昨今の「ゆとり教育」世代の学生には、基本的な学習態度さえ身につけていない者もいる。大学のユニバーサル化により、多様な学生を受け入れざるを得ない状況で、学力を問う前に、基本的な学習態度、主体的な学習活動を身につけさせることが、これからの大学教育には必要ではなかろうか。本実践報告では、大学生の主体的な学習活動を身につけさせる一つの試みとして、eラーニング教材を使用して、一人ひとりの学生に自分に合った学習態度を「気づかせる」取り組みについて中間報告を行う。英語学習においては、eラーニング教材を用いる実践例が増えてきており、さまざまな教材も開発されてきている。最近では、それらeラーニング教材を使用しての英語力アップについて、学会発表や論文発表などもなされてきている。この報告では、少し視点を変えて、自ら学ぶことのつらさと楽しさ、基本的な学習態度を自ら確立することにより、与えられるのを待つのではなく、主体的に活動できるようにするための手段として、eラーニング教材をどのように活用すればよいのかの一例を述べていく。もとより、万人に合った教材や学習方法など難しいが、ひとりでも多くの学習者が、主体的な活動を身につけることにより、英語学習をさらに進めていくことができれば、大学等の新しい役割も果たしていくことが出来るのではないかと考えている。高等教育とはいえ、生涯教育の中での基礎教育とも考えられ得る大学において、学ぶ機会を与えて、学ぶ方法を自ら確立していく手助けを行うことにより、自ら学ぶことの楽しさも会得させていくこともこれからは必要ではないだろうか。中間報告にはなるが、何らかのヒントになれば幸いである。

16 : 10～16 : 40

教科書・電子書籍・eラーニング三位一体の外国語学習教材

上村 隆一（北九州市立大学）

発表者の所属校では、近年新入学生の基礎学力低下により、ESP および EAP カリキュラムの実施以前に、高校レベルの学習内容を改めて定着させる必要性が高まってきた。もっとも、高校までの学習方法をそのまま踏襲しても動機付けに乏しく、学習意欲の低下は避けられない。そこで、発表者は従来の印刷体教科書に加えて、同一内容の電子書籍(PDF フォーマット)を Moodle オンライン学習コースの添付資料として作成し、さらに教科書出版社と大学、教育系学会が協力して開発した eラーニングコンテンツを導入、各教材の役割分担を明確にすることにより、いわば「三位一体」の英語学習環境を構築した。まず、通常の印刷体教科書は、学生が最低限の学習項目を俯瞰し、手書きでメモを書き込む学習ノートとして機能する。次に、電子書籍版教科書は、単なる授業の予習・復習だけでなく、CALL 教室内での授業中に重要関連語彙等の確認、練習問題の自己添削などを能動的に行うワークブック（学習記録も兼ねる）の役割を担う。さらに、PDF に埋め込まれた音声データによるリスニング練習を行ったり、ハイパーリンクをたどって教科書の内容と関連したインターネットのウェブページや動画サイトを検索することも発展的な学習内容に取り込むことが可能である。最後に、eラーニングコンテンツは、各単元のトピック導入部における「予習」ならびに、授業時だけでは不足しがちな文法項目の反復個別学習などの「復習」に特化させた形で活用し、単元学習の「取りかかり」と「しめくくり」に位置づける。これら三つの異なる形式・意匠・操作環境を有する教材は、いずれか一つが欠けても教育的効果が著しく低下することが発表者自身の教育実践において明らかになってきている。本発表では、学部2年次を対象として過去数年間実施してきた専門英語の基礎教育と現在実施中のリメディアル教育における「三位一体型」教材の活用事例を紹介し、今後の課題についても問題提起を行う。

☆第2室

ユトレヒト会議室3

司会：鈴木 千鶴子（長崎純心大学）

司会：柿元 悦子（九州産業大学）

15:00～15:30

中学生の「書く力」を高める授業のあり方の研究

—「論理の一貫性と意味のある英文を書く力」の育成をめざして—

＜2008・2009年度支部研究プロジェクト＞

富永 美喜（福岡市立香椎第一中学校）

川尻 徳（久留米工業大学）

堤 琴恵（福岡市立和白中学校）

中学生の「書く力」を高めるために、平成17年度より国立教育政策研究所により次の2点の必要性が指摘されてきた。

1.「話題の一貫性を意識させる指導」2.「代名詞や接続詞を用いた文と文のつなぎ方の指導」
このことは、中学校の英語教育において、コミュニケーション能力の基礎を養うために重要な課題であり、この課題を見据えた研究の意義は高い。

本研究では、中学生の英語教育における「書く力」を高める授業のあり方を「文相互の関係性」と「伝える相手と伝える内容の明確性」の2点に注目した。具体的には、本研究および指導では下記4項目の条件を満たす英文を書く力をつけることをめざす。

1. 文相互の関係性を持つ英文（接続詞の適切な使用をめざす）
2. 結論から内容の詳細（説明・理由など）へ続く英文
3. 内容の論理性を持つ英文（代名詞の適切な使用をめざす）
4. 伝えたい内容と相手が明確であり、全体としてまとまりのある英文

授業の流れとして、生徒は身近な話題について自由英作文を書く。3人のグループで互いの英文を見せ合い、話し合いながら英文を生徒の力で書き直していく作業を続けた。この研究では、指導者による個別の添削指導は行わない。

発表者が所属する中学校での週1時間の選択授業を通して、定期訪問するALT（外国語指導助手）に自分の考えや気持ちが正確に伝わるような英文を書いて、e-mailで送った。

研究と指導の有効性を検証するために次の2点を行った。

- 1.「本研究における観点別評価の採点規定」を設定した。観点は、内容、構成、語彙、文法の4観点である。各観点5段階の採点規定に基づき点数化し、その変化を追った。
2. 研究および指導の有意性を検証するために、Pre-TestとPost-Testを実施した。

15 : 35～16 : 05

想起ストラテジーを用いた 4 技能統合型授業の実践

仲山 雄二（熊本県立天草東高校）

文部科学省の新学習指導要領では、4 技能を総合的に育成する指導を充実させることや授業を英語で行うことを基本とする、と示してある。また、使用語彙数も増加している。国際化の時代に向けて、次代を担う生徒たちに積極的にコミュニケーションを図ろうとする力を育成することは、大変意義あることである。しかし同時に、生徒の理解力や習熟度に応じた指導法を用いることも大切だと考える。

学習者の中には、英語を苦手としている生徒もいる。特に基本事項で学習につまづきがある生徒たちに、文字、音、意味のつながりを意識しながら、英語を活発に用いて力をつけられる方法はないかと、現在アクロニム式想起ストラテジーを用いた指導や **Speaking Test** を行っている。

アクロニムとは、U.N.=United Nations, A.S.A.P.=as soon as possible など、簡略化した英語表記として多く用いられている。これを英語教育に生かせるように、イニシャル式想起ストラテジーとして変容させた。具体的には、教科書本文の文章を **Sheet A**（記述用）と **Sheet B**（スピーチ用）の 2 つの教材にして、レッスンのまとめの指導用として使用している。

Sheet A については、チャンクごとに意味を取って本文を学習し、音読の訓練や語彙習得を目指して学習した後に導入している。具体的には、本文の訳とアクロニム（イニシャル式想起ストラテジー）として本文のそれぞれの単語を頭文字以外は下線にして、日本語訳を頼りに生徒それぞれが様々に思い起こしながら、アルファベットを埋めて英文を完成させていく。この時、生徒たちにどのように英文を思い起こしているかたずねると、意味、音韻、語彙、そして統語のいずれかの方法で想起しているとおおむね分類することができた。

Sheet B は文字のイニシャルのみ表示され、そのあとは・(dot) で表記されている。このあたりになると生徒の処理速度も速まり、想起イメージを用いて、音声として発信することに集中してくる。

ここでは **Speaking Test** を仕上げとして実施しており、想起による音読の他に、英語による本文内容に関する質問や英作文を用いての英語での自己表現を課している。この指導方法を昨年 9 月から継続して実施している。

発表では、生徒の言語イメージの生成についての考察やこれまでの成果、評価方法、課題、そして今後の可能性について言及したい。

柏木 哲也（北九州市立大学）

1990年代以降、コンピュータを使用した学習者コーパスの編集と分析は、第2言語習得、変異とジャンル、修辞学、発話とライティングなどの分野で盛んに行われてきた。その中でも ESL, EFL 学習者の産出する外国語がどのような特徴を持つのかについての研究は、心理学、対照修辞学、言語学などの分野から多くの研究が成されてきている。

本研究は日本人 EFL 学習者 (JS)、日本人英語教師 (JTE) のライティング作品で使用された語彙、文法特性において英語母語話者大学生 (NS) の書いた論説文と比較した場合の過剰使用語を分析したものである。日本人英語学習者は国立高専と市立大学の工学部の学生（コーパスサイズは 31,969 語）、日本人英語教師は県立学校に勤務する常勤教員（同 36,205 語）、母語話者は英米の大学生（一部高校生）（同 324,157 語）でありコーパスサイズに差はあるが、出現率での比較を行った。特に NS との比較における過剰使用語の中で、to, have, them の3語に焦点を当て、機能的傾向として、to 不定詞、完了時制での have、前置詞と他動詞の目的語としての複数代名詞の them という特性に着目し、コロケーション、クラスター、機能的用法から分析を行った。

結果として、テキストの複雑さを示す異なり語率 (Type-Token Ratio)、平均語長、平均文長は何れも JTE が JS と NS の中間的値を示した。特に日本人の使用した to 不定詞の機能的役割に興味深い傾向（発達指標）が見られたものの、機能的には必ずしも JTE が母語話者に近い使用をしているとは限らなかった。更に JS では to との誤った共起が多く見られ、母語の干渉が原因と思われる。また NS の to との共起では be が多く会話調の語使用が少ない点が顕著であった。NS はこれら3語との共起語に人称代名詞を選ばず、論説文のライティング形式で使用する語彙や文法を熟知しているものと思われる。分析結果において JTE は JS と NS の中間的な位置にあると考えられるものの、ライティング作品において同じ題材を使用した影響も否めず、教師として学習者の困難な事項を意識し過ぎた面もある可能性がある。

☆第3室

ユトレヒト会議室5

司会：米岡 ジュリ（熊本学園大学）

司会：中島 亨（福岡教育大学）

15 : 00～15 : 30

Blending CALL Effectively and Enjoyably for Learners at All Communication Levels:

Expanding Opportunities to Access, Use and Retain New Vocabulary from Online Readings

LOUCKY, John Paul（西南女学院大学）

Results of testing several online reading and glossing programs will be compared, as well as many other multi-level sites. These can help to expand Japanese learners' chances to gain more access to both new word meanings while focusing on their forms and use, in order to better learn and retain them. As well, how to use and integrate such programs to help learners expand their L2 reading and listening comprehension skills, as well as some hints to improve productive abilities will also be given.

15 : 35～16 : 05

A Framework for Computer Assessment of English Sentences

TYSEN, Kevin（鎮西学院高等学校）

Many computer programs developed for English language instruction allow use of the internet to send information, giving the user the freedom to access the program from any computer, without needing to install software.

This research includes ideas for a framework to use when designing computer programs which can analyze and evaluate English sentences, and a report of the results of the implementation of internet pages which include such programming. This research has several unique features, including the following: (1) The programming and internet pages were constructed not by a software company, but by teachers and students. (2) No CGI programming is used; the programming is completely contained in Java Script statements which can be processed even by older browsers. (3) The internet pages include English conversations, questions about the conversations, and areas for the user to type in answers to the questions. The program analyzes the user's answers and, in the case of errors in the answers, gives the user hints about how to compose a correct answer. (4) The users of the internet pages are high school students. College students are involved in the project, not as users of the internet pages, but as contributors to the construction of the web pages. By helping with the design of the web pages, the college students have the opportunity to think about English from both the point of view of a teacher of English, and the analytical and logical point of view of a computer programmer.

This research contributes to English instruction by introducing a framework for computer assessment of English sentences, and by introducing an alternative teaching material and method.

16 : 10～16 : 40

Using Various Types of Corpora to Analyze Changes in Japanese Orthography

MORGAN, Jason (熊本学園大学)

With great advances in computing power and the ease of digitizing large amounts of data through OCR, corpora have become valuable tools for linguists in numerous fields. The question of what corpora are appropriate for a given research project, however, remains difficult to answer. This presentation will cover some of my research using various types of Japanese corpora to analyze the influence of English pronunciation on Japanese orthography through loanword representation. The past hundred years in Japan have been marked by a rapid adoption of loanwords into common-use Japanese. By comparing the proportion of loanwords written in the 'traditional' style versus loanwords written using 'innovative' orthographic approximations of non-Japanese phonemes, the pervasiveness of a loanword's innovative spelling within a certain corpus can be determined. By using corpora spanning different styles and time periods, e.g. the Taiyō Corpus, newspaper archives, web-based corpora, etc., changes in orthographic representation over time and genre can be recognized and examined. Through these results, the relative usefulness of each corpus can also be surmised. As Japanese corpora differ from more heavily researched English corpora in some fundamental ways (e.g. lack of inherent word delimiters such as the 'space' in English, etc.), some corpus theory needs to be revised to suit Japanese corpus linguistics. In addition to an explanation of my research and results, a short overview of each of the corpora along with their specific benefits and shortcomings will be given. Problems regarding corpus size estimation and the significance of inter-corpus comparison of results will also be discussed.

15 : 00～16 : 40 《企業プレゼンテーション》 ユトレヒト会議室 4

司会：小川 直義 (長崎県立大学)

司会：奥田 裕司 (福岡大学)

1. 正興 IT ソリューション (株)
2. (株) アルク教育社
3. (株) エル・インターフェイス
4. (株) 松柏社
5. リアル・イングリッシュ・ブロードバンド (株)
6. (株) ベネッセコーポレーション

17:00~18:10 テーマ別セッション

☆第1室

ユトレヒト会議室2

ICTと多読指導

リーディング・アイランド 九州沖縄プロジェクト

ーインタラクティブな読書コミュニティの開発研究ー

Interactive
Reading
Community



コーディネータ・パネリスト：水野 邦太郎 (福岡県立大学)
パネリスト：西納 春雄 (同志社大学)
東矢 光代 (琉球大学)
川北 直子 (宮崎県立看護大学)

本プロジェクトは、オンラインで互いに洋書を紹介し合い語り合う「読書コミュニティ(IRC: Interactive Reading Community)」を英語多読授業に取り入れることで、「本と人・人と人との絆を結ぶ互恵的な読書環境」を創出し、全国へ拡張させていくことを目的としている。そして、「他者」と関わる読書環境づくりが、学生たちの読みの質や読書の動機にどのような影響を及ぼすか、調査研究を行うことを研究課題として掲げている。

2009年度後期は、以下9の大学から、のべ500名の学生が参加した：福岡県立大学，福岡大学，宮崎県立看護大学，琉球大学，熊本大学，熊本県立大学，同志社大学，上智大学，山形大学。そして、プロジェクト結成を記念して、参加大学の教員と学生が中心となり『楽しみながら英語力アップ 大学生になったら洋書を読もう!』という洋書読書ガイドブックをアルクから4月に出版した。

シンポジウムでは、「相互作用しネットワークする読書活動システム」の魅力を、IRCに参加した4人の教員が、はじめて直接顔を合わせて語り合う。最初に、水野が、IRCへの参加を通じた読書活動の特徴を、エンゲストロームの活動理論の見地から、以下のように「可視化」し、IRC参加への魅力を語る。

<コンセプト>

- 学びの共同体
- マルチ・コンピタンス

<心理的道具>

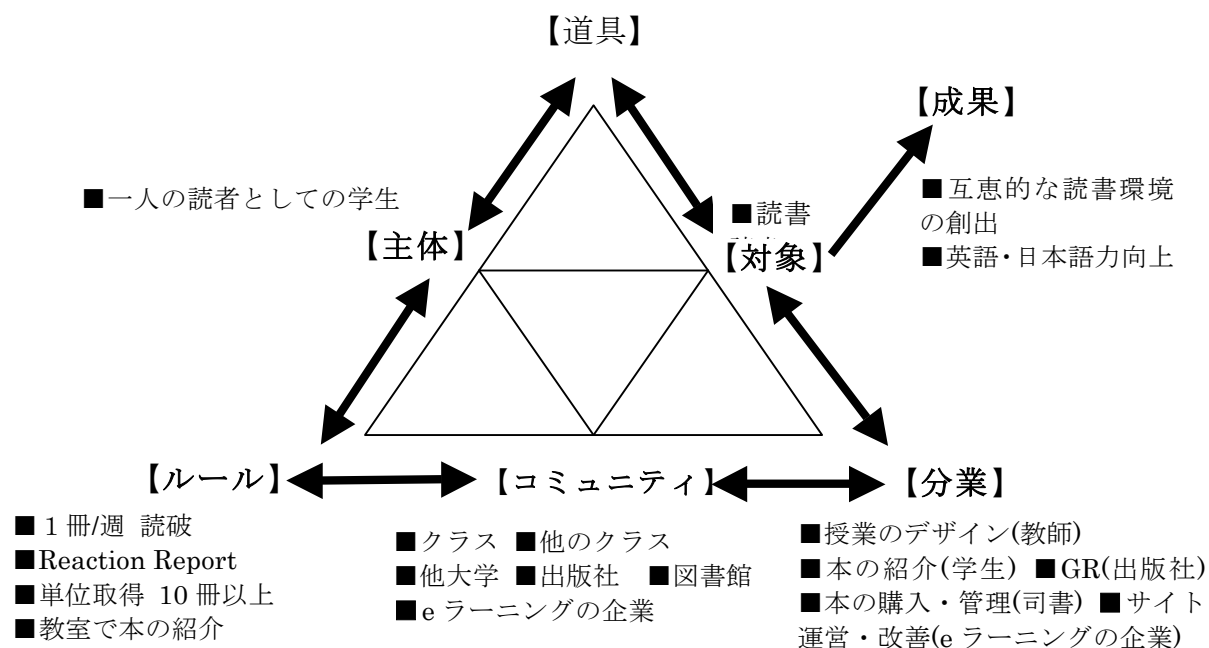
- 英語
- 日本語

<物理的道具>

- 洋書(GR, 絵本, 児童書, 漫画)
- 付箋 ■教室 ■図書館

<テクノロジー>

- パソコン ■インターネット
- Amazon.co.jp ■IRC
- IRC(<http://ilc.eknowhow.jp>)



2009 年度秋学期に IRC を利用して、約 30 名の学生に多読学習（6 冊）を課外学習課題として実施した。学生達は春学期に、教室内で読書体験を交換する多読学習（12 冊）を行っている。春学期と秋学期を、1）学力の伸長、2）課題図書を選択、3）取り組みへの態度、の 3 点について、各種学力テストと学期末のアンケート（記名、記述式）に基づき、比較して多読活動の効果を考察する。

1）**学力の伸長**：C-Test と CASEC それに語彙サイズテストを用いて測定した。これまでの実践（2006-9 年度）から、多読学習は学力下位群（下位 25%）の成績がより大きく伸長するという結果を得たが、今年度の学生については、CASEC の結果は春学期には学力下位群の成績は低下し、学力上位群（上位 25%）の学生の得点が伸びるという結果を得ている。しかしながら、クラスの平均点は上昇を見た。秋学期の CASEC スコア、および春学期と秋学期の C-Test、語彙サイズテストについては、現在分析中である。アンケートには、学力の伸長についての記述は少ないが、英語への抵抗感が少なくなったという意見が多数寄せられた。

2）**課題図書の選択**：春学期には読書レポートに、レベル、ページ数、読書時間など学習記録を詳細に記入することを徹底したため、学生は意識的に徐々にレベルの高い書籍を選択した。しかし秋学期には同一レベルにとどまり、あえて高いレベルに挑戦する学生は少なかった。これは、詳細な記録を徹底しなかったことに加え、IRC が課外学習活動であったこと、IRC への読書レポートやコメントは春学期以上に入念に作成しなければならず、さらにそれを BBS に投稿したことから、学生側の負担が大きく、より短時間で読むことができ理解しやすい書籍を取り上げる傾向が影響したためと考えられる。学生自身からも、選んだ書籍のレベルがやさしすぎたという反省、もっと挑戦的に書籍を選ぶべきであったとの感想が少なからず寄せられていた。

3）**取り組みへの態度**：これは春・秋学期で大きく変化した点である。春学期の読書レポートはクラスメートにのみ読まれたので、気軽に書くことができた反面、構成や内容において妥協したレポートが散見された。秋学期には、未知の読者に書くことから、魅力的なタイトル、書き出し、理解しやすい構成を工夫し、印象に残った箇所を説得力あるように書くことに腐心したことが、アンケートより読み取れる。コメントについても、クラスメートの読書レポートへのコメントを禁じたため、真剣さがいっそう増したようである。それゆえにコメントをもらえたときの喜びも大きいものがあつたと語る学生は多い。また、投稿する際に参照する他大学の学生の意見には、関心を持って読んだ者が多く、IRC は他者を意識しての意見形成、他者の視点を取り入れる点で貴重な場を作り出したようである。

以上、IRC の学習活動を、現時点の資料分析から概観した。発表の際には数値データで示すことのできる部分はより厳密に分析し、アンケート内容も、よりまとまった形で報告したい。

琉球大学からは「リーディングⅡ」（2009年度後期、東矢担当）の授業実践の中での IRC の役割と、学生の反応を中心に報告する。英語専攻学生（2年次対象）34名のクラスで、過去の多読授業の到達目標（50,000語読破）とタスク（英語ジャーナル、Pair-sharing, Class presentation）に加え、IRC への4つのコメントと2つの RR（Reaction Report）投稿をタスクとして加えた。50,000語の到達目標は本の種類も自由、難易度も自由であり、クラス内でのタスクもフォーマットはかなり自由な形で行なっているが、ジャーナル、Pair-sharing, Class presentation はすべて英語で行なうトレーニング的なものである。それに対し IRC への書き込みでは、RR において3箇所引用を含む、印象に残った Quotation を訳しコメントをつけて紹介する、またコメント機能においては RR を引用しつつコメントする、などフォーマットが決まっており、しかも日本語で表現することを求められる。またクラス内タスクと異なり、IRC ではオンラインでこそつながる他大学との関係が構築できる。学習者の行動はタスクにより規定され、タスクをこなすことで能力の育成が図られるという観点から、実践においては教師側の意図として、IRC の利用とクラス内のタスクが相互補完的関係にあることを期待した。特に IRC の活用においては、投稿形式に則ることにより「日本語による表現力の養成とより深い読みが得られる」こと、そして「オンラインならではの学外との交流の場が得られ、それが学習意欲につながる」という効果を予測した。

発表では学習者への記述式アンケート結果から、(1) IRC を使った感想、(2)英語ジャーナルと IRC への投稿の比較について紹介し、考察する。一般的な感想の中で最も多かったのは、コメントをもらったことによるポジティブな効果で、このような交流が学生のやる気につながる事が明確になった。またアンケート結果からは、交流の場としての IRC の機能と同時に、本についての情報を得る、異なる見方・読み方に触れる、書き方の参考にする、などデータベースとしての機能も浮かび上がった。実際の投稿においてジャーナルとの比較では、学外との交流は「他人の目」を意識させること、引用を求める課題形式が受講生の「より考えて投稿する態度」を引き出す、という予想通りの効果が確認できた。また学生によってジャーナルと IRC の効果の認識や好みに差が見られた。その中でも IRC への投稿において、交流の楽しさと引き換えの緊張感については、その感じ方の差から、よい効果をもたらすかについて慎重に見極める必要があることも示唆された。

なお学生の日本語での表現力が英語ジャーナルのものと一致しないであろうことはあらかじめ想像はしていたが、そのギャップは予想以上に大きかった。今回の実践では英語専攻学生対象ということで、ジャーナルを通して「英語で書く力」の養成も図っているが、実際のクラス運営においては学生の負荷の感じ方には個人差がある、という面を認識しつつタスクを組み合わせる必要性を、改めて感じた。

選択科目「英語講読 I」（Extensive Reading）の中で 1 年次生 98 名が IRC に参加した。大学で外国語カリキュラムをデザインする際、専門教育とどうつながっていくのかを考える必要がある。IRC の良さは、参加した大学がそれぞれ独立した教育目標を保ちながらコミュニティを共有できることにあった。

宮崎県立看護大学の場合、外国語科目はカリキュラムモデルの中の「個の尊重と看護」の下に位置づけられており、英語科目の役割は「個を尊重するコミュニケーション能力」と「外国語運用能力」の養成ということになる。IRC 参加にあたり、(1)「個の尊重と看護」に向かったシラバスになりうるか、(2)専門教育に必要な英語教育へつながるか、という 2 つの視点から、以下のような意義を見出した。

(1) 「個を尊重するコミュニケーション能力」と IRC

1) 心が動いた場面の意識化：本学の 1 年次生は、病院・施設などでフィールド体験実習という数日間の実習を体験する。実習時、「心が動いた」場面をラベルに記述し、共有し、抽象化し、報告する。IRC の Reaction report では、「心が動いた」場面を引用し、その場面についてどのように心が動いたのかを表現する。

2) 個の気づき：IRC のレポート交流と最終レポート課題を通して、同じ本を読んだ読者が異なる解釈・感想を持つことを学生が意識する。これまでに「文章を正しく読み取る」ための学習をしてきた学生たちは、IRC で読み手の「個」を意識している。

3) 相手の認識（理解・思考・感情）を意識した表現：

看護者は、「学習と経験と相手の立場に立つ訓練」によって、「人間を判断する能力を高める」必要がある（薄井坦子「科学的看護論」より）。IRC は、書いた文章を通して他人と関わりながら学ぶ 1 つの機会である。

(2) 看護のための英語教育と IRC

学生がこれまでに読んできた英文は、今後読まなければならない英文と比べると量的なギャップがある。特に英語の苦手意識の強い学生は、まずは長い英文への抵抗感を克服する必要がある。そのための 1 つの仕組みとして IRC を利用した。

さらに、本学では、2009 年度後期に IRC に参加する以前に、学内で IRC 方式の講義を展開してきた。学生の取り組みの状況・最終レポートの記述を示しながら、大学間交流のある IRC 効果についても考えたい。

☆第2室

ユトレヒト会議室3

ICT と ESP

コーディネータ・パネリスト：山内 ひさ子（長崎県立大学）

パネリスト：安浪 誠祐（熊本大学）

荒木 瑞夫（宮崎県立看護大学）

ESP では生教材を扱うことが多いことから、ICT を利用することにより、教室という限られた空間であっても、インターネット上で利用可能な生教材を使用することが可能である。また、ICT により海外の学生と直接に交流することは、英語による生のコミュニケーションを図ることを可能にする。このシンポジウムでは3名のパネリストがそれぞれこれまで行ってきた ICT 利用の ESP の授業について発表し、フロアーの皆さんと一緒に学士課程に求められている「専門分野の内容を学ぶために必要な語学力の修得」についてどのように ICT が利用できるかを考えたい。

宮崎県立看護大学では、週1回の必修英語の最終学期となる2年生後期に、海外看護学生とのライティングを通じた交流を行なっている。約100名の履修者が、他国からの参加者（2009年度はイスラエル、スペイン、台湾、トルコから約250名）と Moodle の掲示板で約4ヶ月間交流を行う。この実践において、異なる文化的背景をもつ他の参加者や自分達と異なる看護に対する考え方に直に触れることで生じる学びの創出を目指しつつ、言語学習面の充実に関して教師たちはアクションリサーチを続けてきた。交流では沢山書く能力は伸び易く、語彙・文法面の学習の機会とするには検討課題が残る。この実践を題材に education の側面も備えた ESP の実践の可能性についても論じたい。

熊本大学の英語教育は、英語担当教員による1年必修科目（英会話、リーディング&ライティング、リスニング、CALL）と2年選択必修科目（前述の科目の応用編から2科目選択）、専門学部教員による英語D（医学英語、保健英語、薬学英語、工学英語）から成り立っている。英語担当教員による科目は、全学共通シラバスに基づいており、学部の特化した教材選定はなく教授内容でもない。発表者は主に CALL 教材を用いた科目を担当しているが、医学部学生対象のクラスでは VOA の Standard English の Medical Topic の素材を基に開発したリスニング教材を副教材として使用している。この教材をベースに全学基盤 LMS システムである Blackboard を用いて行う授業の手順、学習プロセスについて述べることとする。

長崎県立大学の国際交流学科での ESP 科目としては「通訳 I」というクラスで観光英語を教えている。この科目は選択科目であるが、履修制限があり、TOEIC550 点以上取得者（または英検 2 級以上）が受講できる。授業では、CD 付きのテキスト教材のほか、インターネット上の情報を利用した通訳練習、国内の世界遺産のプレゼンテーションなど、Blended Learning を実施している。CALL 教材は現在試作中なので、CALL 教材を用いた授業はまだ実現していないが、教材開発が進めば、CALL 教材による学習を含む Blended Learning を行う予定である。

☆第3室

ユトレヒト会議室5

ICT とリメディアル教育

コーディネータ・パネリスト：長 加奈子（北九州市立大学）

パネリスト：大藺 修一（九州産業大学）

植田 正暢（福岡女学院大学短期大学部）

大学全入自体を迎え、幅広い学力層の学生が大学に入学するようになった。また「ゆとり教育」の影響もあり、本来、高等学校までに身につけておくべき基本的な学力を身につけずに大学に入学する学生が増えてきている。そのような学生の多様化に対し、これまでの授業形態では対応できない状況に教員は直面している。本シンポジウムでは3名のパネリストが ICT を活用した言語教育（リメディアル教育）について報告し、リメディアル教育において ICT がどのように活用できるのか、またその問題点についてフロアとともに考えたい。

北九州市立大学国際環境工学部では 2009 年度、約 100 名の学生を対象に e-learning 教材と通常の紙媒体のテキストを用いたブレンディッド・ラーニングに基づく英語の授業を行った。これは e-learning 教材と紙媒体のテキストがセットとなっており、学生はテキスト内容に応じた予習・復習を、e-learning で行うようデザインされたものである。本発表では、予習（e-learning）→授業（テキスト）→復習（e-learning）の学習サイクルで行われた必修英語の授業の実践例を報告するとともに、リメディアル教育におけるブレンディッド・ラーニングの有効性と問題点について論じる。

九州産業大学の「全学共通英語教育」では、全学生を対象に、九産大型の学部横断的少人数能力別クラスを編成している。これにより、初級クラスで徹底したリメディアル教育（三段階指導）を実現可能にしている。毎年入学生の約 40%がこのレベルに属するため、基礎的英語力の底上げが急務となる。本発表では、特に、2007 年度より開始された「英語」初級クラスにおける「三段階指導」（①独自文法教科書による文法力・語彙力の徹底、②e-learning 課題学習による練習・演習、そして③小テストによる学生の学習確認）について報告し、リメディアル教育の可能性について意見を交換したい。

福岡女学院大学短期大学部では、2009 年度に朝日新聞社が提供する e-learning サービス「e 学び力」を利用した。この教材は、大学での学びを支えるスキル（「聴く」、「読む」、「書く」、「まとめる」、「整理する」）の必要性を学習者に気づかせることをねらいとした教材である。本学では、日本語リメディアル教育ならびに学習スキルの会得を主眼に置いた科目の補助教材として用いた。学生は課外で主に利用したが、その利用率が 89.4%であった。本発表では、学生に利用を促すために行ったさまざまな試みを紹介し、どのような働きかけが有効であったのかを論じる。

お知らせ・お願い

【参加費用・入場料】

1) ハウステンボス内に学会割引料金で宿泊される場合：

- ・会員：無料
- ・当日会員：参加費 1,000 円（資料代）
- ・同伴者：無料

2) ハウステンボス内に宿泊されない場合：

- ・会員：入場料 1,000 円
- ・当日会員：参加費 1,000 円（資料代）＋入場料 1,000 円＝合計 2,000 円
- ・同伴者：入場料 1,000 円

【懇親会】

懇親会（会費 6,000 円）へ参加を希望される方は、大会受付にてお申し込みください。大会当日 13 時まで受付を行います。ただし定員になり次第、締め切らせていただきます。お早めにお申し込みください。

【宿泊】（家族同伴あるいはグループでの申し込み可）

宿泊費（一人あたり）

	シングル	ツイン	トリプル	フォース
ホテル・アムステルダム	13,965 円	11,340 円	9,975 円	8,820 円
フォレストヴィラ	設定なし	設定なし	10,395 円	10,395 円

《キャンセル料》不泊 100%，当日 80%，前日 20%

*複数でご宿泊される場合につきましても、大会参加の有無にかかわらず全員参加登録を行ってください。

【大会受付】午前 10：00 ～

1) 会場内に宿泊される方：

ハウステンボス入り口の大会専用受付（コンベンション受付棟）にて入場券をお受け取りください。その後、手荷物を場内ホテル受付で預け、その後ユトレヒト内受付にお進みください。宿泊費はチェックアウト時にフロントで各自ご精算ください。ホテルアムステルダムご宿泊の場合はホテルのフロントで、フォレストヴィラご宿泊の場合はホテルヨーロッパのフロントでご精算ください。

2) 会場内に宿泊されない方：

ハウステンボス入り口の大会専用受付（コンベンション受付棟）にて、入場料 1,000 円を支払い、ユトレヒト内受付にお進みください。

【その他】

- ・記念大会および懇親会中は必ず名札をおつけください。またハウステンボス入場券は、無料ゾーンから有料ゾーンへ再入場する際に必要となりますので常にご携帯ください。
- ・会員の方で年会費を納入される場合は、受付にお申し出ください。
- ・当日会員の方で LET 九州・沖縄支部への入会を希望される方は受付へお申し出ください。
- ・大会中、伝言やお知らせは受付横の掲示板に張り出します。ご希望の方は受付へお申し出ください。
- ・お煙草は受付横の喫煙コーナーをご利用ください。その他の場所は禁煙です。
- ・記念大会当日、17 時～18 時まで「宅配便コーナー」を大会受付横に開設いたします。
- ・「休憩・ドリンクコーナー」をユトレヒト 3 階ホワイエ内に設けております。ご自由にご利用ください。なお冷たいお飲み物は園内の自動販売機をご利用ください。

【交通アクセス】

別紙「ハウステンボス入場についてのご案内」をご覧ください。

【オプションツアー】

大会翌日は、次のオプションツアーをお楽しみください。

- ・ ハウステンボス内見学
 - 1日のみ：「1DAY とくとかチケット」(2,000 円)
 - 2日間：「2DAY とくとかチケット」(3,000 円)
 - 2日間以上：「フリーパスポート」(2,310 円 園内宿泊者に限る)
- *各チケットの詳細については、コンベンション受付にお尋ねください。

また大会期間中は、「龍馬伝館」がオープンしています。入場料 500 円でご観覧いただけます。
また観光丸幕末クルーズ 800 円、入場料とクルーズのセット券 1,000 円などもございます。

- ・ 環境設備見学
- ・ 佐世保パールシー・リゾートに代表される佐世保界隈の散策

問い合わせ先：

〒808-0135 福岡県北九州市ひびきの 1-1
北九州市立大学 長 加奈子研究室内
LET 九州・沖縄支部事務局

電話 093-695-3249

Fax 093-695-3324

E-mail: secretariat@j-let-ko.org

<展示協賛企業（50 音順，5 月 10 日現在）>

- ・ 開隆堂出版株式会社
- ・ 株式会社 アルク教育社
- ・ 株式会社 エル・インターフェイス
- ・ 株式会社 金星堂
- ・ 株式会社 松柏社
- ・ 株式会社 成美堂
- ・ 株式会社 ベネッセコーポレーション
- ・ 正興 IT ソリューション株式会社
- ・ チエル株式会社
- ・ 日本ビクター株式会社
- ・ リアル・イングリッシュ・ブロードバンド株式会社

2010 年 5 月 20 日発行

編集・発行	外国語教育メディア学会（LET）九州・沖縄支部
代表者	島谷 浩
発行所	外国語教育メディア学会（LET）九州・沖縄支部事務局 〒808-0135 北九州市若松区ひびきの1-1 北九州市立大学 長 加奈子研究室 TEL: 093-695-3249 FAX: 093-695-3324 E-mail: secretariat@j-let-ko.org
印刷	平和タイプ・プリント社

